

氏名	オオ ヒラ リュウ イチ 大 平 龍 一
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博 美 第 329 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉 MIBOKU、FUKUKOZUCHI、DAIKOKUTEN、JIPPYOU、凸凹口 御木、福 小槌、大黒天、十俵、デコボコフラット 〈論文〉 凸凹ノスゝメー異形の世界を求めてー
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 深 井 隆
（論文第 1 副査）	〃 准教授（ 〃 ） 布 施 英 利
（作品第 1 副査）	〃 〃（ 〃 ） 森 淳 一
（副査）	〃 〃（ 〃 ） 原 真 一

（論文内容の要旨）

本論は、次の時代へのアプローチとして、彫刻表現によって空間、あるいは意識を凸凹させる上での指針とするものである。私たちは今、均質、均一、規格、平均、フラット、スタンダード、統一、金太郎飴化した社会に生きている。それは地方においても同様で、郊外型大型ショッピングセンターや全国チェーン店の進出、道路の拡張工事による沿道の商店の閉店など、フラット化する社会の蔓延が痛感される。拡張される前の道は細くぐねぐねと曲がり、また閉店するどの店も画一化されていないことをみると、規格化、均質化の流れに押され、規格外の物や異形なる物が失われつつあると言える。こうした平板になろうとする社会の流れを超え、次の段階へ進むためには、いま一度均質かつ平滑な世界を打ち破り、凸凹したモノ、凸凹した環境を創造しなければならない。それが次の時代へのアプローチとなる「凸凹ノスゝメ」である。筆者が行う彫刻表現は物理的かつ社会的な凸凹を目指す。それは彫刻がモノとして世界に存在し空間を刻むだけでなく聴覚や知覚にも響くモノとしての存在を現出させる行為である。

第 1 章「凸凹ノスゝメ」では、非均質空間となにごとのおわしますかをキーワードに、どのような状況が凸凹を凸凹たらしめるのかについて考察する。地理的に異形な姿として見出された凸凹の場所、あるいは感覚的に凸凹を感じさせる事例として「木」を、物理的、社会的に凸凹を作り出す色として金色を取りあげその構成要素を探る。さらに音楽とカタチの繋がりに触れ、視覚、知覚、聴覚、様々な面から凸凹について考察する。

第 2 章では自作品を見ていく中で「空間と境界」「領域と異界」「音楽と彫刻」以上の 3 つの項目に分類し、異形と凸凹した世界の創造への道を辿る。空間とその空間を満たしている物質とそれらの関係、さらに同じ物質がある環境の中でしかる形態としてそこにあるとき、鑑賞者に特定の認識が与えられるという状況について述べる。また、両者の間にある境界の観点から、異形あるいは凸凹といった作品の展開について考察する。さらに提出作品へと繋がる音楽と彫刻について考察する。

第 3 章では本研究を指針として制作した提出作品 3 組、7 点について述べる。本研究から得られた凸凹の成立要素を再度整理し、素材や図像、その他の構成要素について考察する。また、制作過程におい

て浮上した問題点や解決のプロセスを提示する。

《MIBOKU》では、巨木を用い、人を惹きつける求心性と周りへの浸透性に眼を向けている。(図1)ここでは、均質な世界に境界を設け、その境界に特定の属性を与えるため巨木にスピーカーを内蔵させ、視覚的かつ聴覚的な凸凹世界の現出を試みる。元来姿のみえない神を依り代として感じられるようにしてきた巨木や巨岩。新たな解釈による依り代的存在を目指す。

《DAIKOKUTEN》では、インド由来で豊穡と破壊の神として崇められてきた大黒天像の変遷を神像彫刻の造形とその意図から読み解き、現代に新たな像の制作を試みる。(図2)

《FUKUKOZUCHI》では大黒天の持つ「打ち出の小槌」を凸凹への願いをこめてつくる。(図3)木彫で使用する木槌と打ち出の小槌の関係を探り、新たなものを「打ち出す」モノ、凸凹を生む道具として木槌を捉え再構築。ここでも《MIBOKU》《JIPPYOU》と同じく、音によるアプローチを試みる。

《JIPPYOU》では2010年夏に出雲で参加した俵を担いで走るレースなど、大黒天シリーズ制作のきっかけとなる経験を記し大黒天につきものとなった米俵をモチーフに制作する。(図4)張りのある米俵の膨らみとそこから飛び出す音の張り。人々の心を満たす図像としての米俵を作り出す。

《凸》《凹》《<sup>でこ</sup>《<sup>ぼこ</sup>《<sup>フラット</sup>》》3点の組作品は両手にすっぽり収まる3点の作品。大きさはほぼ同じ3点であるが、素材、重さ、図像によって本論文にて記してきた凸凹とフラットの繋がりを記号的、象徴的に解釈し提案する。(図5)《MIBOKU》《JIPPYOU》《DAIKOKUTEN》以上3点の作品からは音が発せられる。発せられる音の創造においても凸凹を実現するため、発せられるのは無音になり、世界が静寂に包まれたときのみ発せられる。制作した音は人間の可聴域を越える低音と世界で聖音といわれる音の組み合わせで成り立ち、今日の整った環境音世界に切り込み凸凹にする。

最後に、これら知見と制作実践から、なぜ今凸凹が必要なのか、彫刻における凸凹とはいかなるものであるかを探る。そこで筆者は次の時代において世界の解明と創造をするためには時代と空間(時空間)を読み説くことで成し得ると覚知したのである。

世界がフラットで均質になるほどに、そこに現れる異形なるものがより強調されることは自明である。ならば世界のフラット化はそういった異形なるモノたちを引き立ててくれる流れともいえよう。いまこそ凸凹した世界の創造の時なのである。多様化する世界を大きく捉え、そこに一槌を与えることが次代の彫刻表現に求められる。それには下地となる現代社会を読み解く必要がある。世界が縮小効率化へ向かうのであれば拡大非効率化へ、世界が均質あるいは論理的になるのであれば非均質、非論理的な表現をすることが凸凹ノススメとなるであろう。

どうして人は苦勞して山にのぼるのか。「なぜならそこに山があるからだ」と答えた登山家がいた。筆者はなぜ重くて扱い辛い巨木を作品にするのか。なぜなら巨木がそこにあるからだ、といえよう。山は「そこにある」この言い方は正解であろう。山は超人間的に「そこにある」としか言いようもなく存在しているからだ。同様に巨木もまた、人間の作為や理解を超えたものとして存在している。神々は山に住むと考えられたように、木もまた信仰の対象となってきた。しかしなぜ自らの力で山に登らなければならないのか。征服しなければならないのか。このような意味では巨木もまた自己実現のための素材にすぎない。木が材木になった瞬間、神は消えてしまうのかもしれない。では山に登る事、木を彫って作品を作る事とはどういうことか。バスや車で山の頂きへ登ってもそれは登山とはいえない。人が山に登るとき、それによって自己を鍛え、精神と身体を最大限に研ぎすます。感情を洗い、勇気と忍耐、理性と意志を養うためである。征服すべきものは山ではなくむしろ自己である。筆者が巨木と対峙する場合も同様である。巨木が大きくなるほどに、重くなるほどにその試練から再度、超人間的な「なんごとか」との繋がりを得るのだ。

時に巨木となり、時に音となり、あるいはふとした日常に潜む静物へ。様々なカタチで私たちの前に現れる超人間的な現象やモノたち。筆者はそれら一柱一柱、一神一神を人の手によってカタチにしていきたい。そうして私たちの周りから薄らいでいく「なんごとか」を愛を持って見つけることが世界を凸凹にすると信じて。なにせ八百万いるのだから、この先題材に事欠くことはなからう。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、彫刻制作と取り組んできた筆者が、現代社会の諸相に「彫刻」という分野からどのような働きかけができるか、という思索と主張をまとめたものである。

筆者の大平龍一くんは、まず現代社会が、均一化、フラットしている状況であると指摘する。「どこの駅を降りても同じ風景、同じレストラン、同じ洋服」。そこに違和感と窮屈さを感じ、あえてその正反対の哲学ともいえる「凸凹」という概念を提唱する。

本論文では、第一章では「凸凹ノススメ」と題して、凸凹（でこぼこ）した非均質空間を、神社などの建築空間、それにクリムトの絵画、音楽などに探る。続く第二章では、「自作品で辿る凸凹への道」と題して、筆者が自身の彫刻作品にいかに関心や思想をこめてきたかを語る。いわば凸凹の実践レポートである。パーティションで区切られた空間に、非均質な世界を作り出したり、大量の蟬の木彫を民家の床に敷き詰め、そこに非現実的な空間を現出させたり、腐敗しかけた古木の断片を山などの風景に見立て橋をかけ、床の間に飾り、異界を垣間見せてくれたりする。そして最後の第三章では、提出作品についての解説がされる。

筆者の彫刻作品に一貫してみられるのは、作品が置かれた空間に「異界」をみせようという試みである。そこには画一化、均質化されたフラットな空間にはない、その反対の凸凹した世界が現れる。

そもそも芸術というものは、一般に作者の個性を重んじ、通俗化した世界に異を唱える、いわばアウトサイダー的な側面がある。筆者の主張する「凸凹」の哲学は、まさにそのような芸術の、まっとうな思想化でもある。だから彫刻家を志す筆者が、凸凹を志向することは、芸術においてきわめてまっとうなスタンスである。筆者は、その志を論文として纏め上げた。さらにそれは単なる言葉による主張ではなく、彫刻制作という実践に支えられ、いっそうの説得力を持つ。

彫刻という芸術によって、現代社会に何ができるか。そこに「凸凹」という明快な思想を宣言した本論文には、現代文明に切り込もうという強い志と意義があり、よって本論文を合格とする。

(作品審査結果の要旨)

大平龍一は木を主な素材として作品制作を続けている。発表を始めた初期の作品から今回の提出作品《MIBOKU》には一貫した眼差しがある。それは「境界」というものへの関心であり、それが大平の作品を特長づけ、作品を展開する核ともなっている。初期の作品（《媒体》、《ベルトインパレーション》、《シマ》など）では観者が作品を「見る」ことで得られる視覚情報を手がかりに「境界」というものを認識できるような作られ方をしているのに対し、《MIBOKU》では、視覚というものを越えて、更にストレートな「境界」へのアプローチが実践されている。

《MIBOKU》は巨木を削り貫いたウーファーである。作品の周辺で拍手を打つと一定の時間、作品から低周波（主に30Hz付近、またはそれ以下）が流れる仕組みになっている。ここで使われている音（低周波）は私達の普段の生活では認識しづらい音域の音の重なりにより作られており、耳で「聞く」という類いのものではなく、音の「震え」を身体全体で浴びるような類いのものである（作品に使用されている音は展示空間全体を震わせるような音量調節が施されている）。

自然の中にも存在する低周波や超低周波は私達人間にとって認識しづらいものである。

しかし、これらの低周波は、地震、雷、豪雨などの発生時にも放出されるものであり、人に危険を知らせてくれる筈のものでもある。これらの音が私達にとって認識しづらい音域にあるということは皮肉なことではあるが、こうした未知なるものへの関心が人の芸術的創造の契機となっていることは少なからずある筈である。

「柏手を打つ」という原始的な祈りの形式の先にあるものは「可視できないもの」、「可聴域にはないもの」である。《MIBOKU》は人が認識できる「こちら側」の世界と、可視・可聴できない「あちら側」の世界の「境界」を感知させる装置として機能し、私達の空間が決して均質なものではなく、多様なものにより重層されている、ということを感じさせてくれる彫刻である。

今回の提出作品と研究内容を学位に値するものとして評価したい。

#### (総合審査結果の要旨)

大平龍一は、論文「凸凹ノスゝメー異形の世界を求めてー」作品「MIBOKU 御木」他を提出した。

大平は、日本が（あるいは世界が）均一化していると考える。その中で芸術はどうあるべきか、自身はどのような作品をつくるべきかを真剣に考え、彫刻制作に正面から取り組んでいる。その情熱は巨木に向かう。一方卓越した技術で細密な木彫も作る。また「音」を作品に取り込み、空間を変容させる。

「MIBOKU 御木」は樟の大木を内割りし、内にスピーカーを入れ、柏手を打つと音が流れるようになっている。神社で参拝するような形式をとることによって、観客とのコミュニケーションを交わす。「福小槌」、「大黒天」は一体となった作品で、樟の大木でできた「福小槌」を小さな「大黒天」が支えている。直前に出雲で個展を開催し、出雲の風土、宗教、風景、などを感じ、自身の非均一化というテーマを意識した作品にしている。

論文では、これまでの作品から提出作品までをたどりながら、大平にとってのキーワードを組み入れ論を進めている。やや論が荒削りなところもあるが、イメージが豊かで想像力をかきたてるものになっている。今後、大いに飛躍し、スケールの大きな彫刻家となるのではと感じさせる。

主査、副査全員で協議し合格とした。